

令和5年度 奈良市立二名幼稚園 研究実践概要

園長名 杉浦 順子
全園児数 12名

1. 研究主題

「豊かな感性で感動を表現する幼児を目指して」
— 身近な環境とのかかわりを通して —

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

核家族や少子化、新型コロナウイルス感染拡大防止対策もあり、入園するまでは家族中心の生活で温かく見守られていることが多く、生活体験や人とのかかわりが希薄になってきている。幼児期に自分の思いを出しながら思い切り友達と遊ぶ楽しい体験や、思いをいろいろな方法で表現する体験等の生活体験が不足している。

そこで、身近な環境（人やもの）とのかかわりを通して、感動体験を重ね、その感動を表現できる環境や援助の工夫をして、意欲的に活動する幼児を育てたいと考え主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・幼児が身近な環境とのかかわりの中で様々な感動体験をし、感じたことや思ったことを活動の中で自由に表現し、楽しい生活ができるように努める。
- ・身近な人々とふれあう体験を通して自分の思いを相手に伝え、相手の思いもしっかり聞きながら、園生活を楽しいと感じ、意欲的・主体的に遊ぶ中で、たくましく生きる力を育み、心豊かに思いを表現する幼児を育てる

②研究の重点

- ・研究主題について、職員の共通理解を深め、組織的・計画的・継続的に取り組みの方法を探り実践する。
- ・家庭や地域・近隣校園との連携を深め、地域の環境や人とのかかわりを活かし、感動体験を積み重ねる。
- ・さまざまな環境とのかかわりを通して感動体験が重ねられるような、また、表現できるように環境構成の工夫とや保育者の援助のあり方を探る。
- ・幼児が安心して園生活が送れるように、保育者が一人一人の実態を把握して、発達を促していく。
- ・幼児の特性や発達の姿をとらえ、幼児理解を深めながら、心豊かに思いを表現できるような環境構成や指導の工夫をするとともに、保育内容の精選や創造をする。

③活動の方法

【事例1】

4歳児 6月 「ペンギンみたい」

ねらい ○ 泡や水の感触を全身で味わって遊ぶ。

□活動の様子 身近な環境 感動を表現する姿

タライに石鹼粉、水を入れスポンジや泡立てネットを使い泡遊びをすることを楽しんでいた。遊ぶうちに水の量によって出来上がる泡の固さが違うことに気付き、「ふわふわで気持ちいい」「ぷるぷる踊ってる」「とろとろの泡ができたよ」と保育者に伝えに来る。繰り返し遊ぶうちに「今日のはとろとろの泡をつくりたい」とどんな泡にしようかイメージをもって遊ぶ姿が見られるようになった。

次第に出来上がった泡をプラスチック段ボールの的に付け、水鉄砲で泡を流す遊びと変化した。すると偶然、風で的のプラ段ボールが倒れた。泡だらけのプラ段ボールの上に乗ってみると「つるつるしてる」「(泡で) 足が気持ちいい」と歓声が上がった。つくった泡をわざとプラ段ボールの上にこぼして感触を楽しんでいる。「気持ちよさそうだね」「もっとたくさん泡つけると楽しそう」と子どもの気持ちに寄り添い、全身で泡遊びを楽しめるよう大きいプラ段ボールを用意し、保育者も泡をたくさんつくって乗せた。遊びの場が広がったことで寝転がったり、腹ばいで滑ったり、泡を全身に塗りたくって遊んだり遊びがダイナミックになった。「ペンギンみたいに滑れるよ」「サンタさんのヒゲみたい」「足が(泡で) 隠れちゃった」「お風呂入ってるみたい」と笑顔で保育者や友達に伝える姿があった。

【考察】

- ・ これまでに様々な泡遊びを経験し泡に親しんでいたことで、全身を使った遊びを十分に楽しむことができた。
- ・ 偶然の面白さ、遊びの発展、子どもの興味関心を見取り、タイミング良く声を掛けたり環境を再構成したりすることで、楽しさや面白さを味わうことができ、感動体験となった。心が動くことでと自然と表情がほころび、言葉や仕草で楽しさを表現する姿となった。



【事例2】

5歳児 10月 「いっしょに おどろう！」

- ねらい ○ 友達と一緒に曲に合わせて踊ることを楽しむ。
- 言葉や体で伝える楽しさを味わいながら異年齢児と関わる。

運動会を経験し、友達と一緒に気持ちを合わせて踊る楽しさを味わった。運動会後も友達と一緒にダンスを楽しんでいる。

運動会で踊ったダンスを4歳児が興味をもち始め、5歳児が踊っている様子を近くで見ている。

保育者が「うさぎぐみさん、ずっと見てくれているね。」と、投げかけるとA児が「いっしょに踊りたいんちゃう？」と、周りの友達に知らせた。B児が「うちわを渡したらいいんじゃない？」と提案し、練習用のうちわを4歳児の数名に渡そうとしたら、A児が「きれいな方（本番用）を貸してあげるといいんじゃない？」B児「そうやね！」と、自分は飾りの付いていない練習用を持ち、布飾りの付いた本番用のうちわを4歳児に貸した。保育者が「うさぎぐみさん、いいね。にじ組さんのかっこいいうちわを貸してもらえたね。」と言うと、うちわを借りた4歳児はうれしそうにうちわを振りかざし、喜んでいた。

曲が始まると5歳児は踊り始めた。4歳児も長い布の付いたうちわを少し扱いにくそうにしながらも、曲を聴きながら好きに踊っていた。その様子を見ていたA児は「布は地面に付かないように踊ったらかっこいいんだよ」と、4歳児のC児に知らせると、周りの5歳児も4歳児に「横、横、くるりんってするんだよ」と、踊り方を優しく知らせる姿が見られるようになってきた。4歳児も5歳児が教えてくれていることを一生懸命に聞き、楽しんで踊る姿が見られるようになってきた。

しばらくすると、自分達でデッキを操作し、4歳児と関わりながら自分達で楽しむ姿が見られるようになってきた。

【考察】

- ・運動会という大きな行事を経験し、自信につながったことで遊びにも意欲的に取り組む姿へとつながったと思われる。
- ・練習用と本番用の手具では、自分達が実際に踊って経験したことで本番用の方がかっこよく踊れると考えている。このことが4歳児にもかっこよく踊ることができるように本番用の手具を貸すという姿につながったのではないかとと思われる。
- ・4歳児が踊っている姿を見て、自分達の経験から、踊り方を知らせ、自分達のイメージを伝えたのではないかとと思われる。このことで、4歳児は5歳児に、より近づくことができ意欲が高まり、お互いに楽しんで関わりを深めることができたと思われる。



5. 研究の成果

- ・様々な人やものとのかかわりを持ち、交流する中で、刺激を受けたり、気づきや発見をしたり、他者との違いを刺激し合って高め合っていこうとする姿が見られた。こういった経験を重ねることで、自分の思いを言葉だけでなく、いろいろな表現を通して伝えられるようになってきている。
- ・幼児の思いを受け止め、発達や興味・関心に応じて環境や援助の仕方を工夫したことで主体的に表現する姿も見られた。

6. 今後の課題

- ・保育者は、幼児が何に心を動かされているのかを読み取りながら見通しを持って環境構成や援助をしているが、同時に幼児なりのイメージを具体化するための援助や保育者自身が柔軟な見通しをもつことが、幼児自ら“やってみよう”という行動に繋がる事がわかった。
- ・来年度は単クラスになるので、幼児一人一人の実態を捉え、様々な環境の中で刺激を受けながら主体的に遊んだり生活したりできるようにと考えている。これからも近隣校園や地域との連携、園内外の自然環境なども十分に活用しながら遊びを深め、一人一人の幼児の学びにつながる環境構成や援助を工夫していくことがより一層大切であると考えている。